



THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

トヨタ財団レポート

No.103
Oct.2005

ISSN 0389-1984

contents

「鉄腕アトム」「水戸黄門」からの脱却 木村尚三郎	1
2005年度 新プログラム紹介	2
ネットワーク形成プログラムについて 姫本由美子	2
研究助成の新規特定課題について 本多史朗	3
2004年度「地域社会プログラム」贈呈式を開催して 田中恭一	4

[財団法人トヨタ財団]

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37階

TEL(03)3344-1701 FAX(03)3342-6911

http://www.toyotafound.or.jp/

「鉄腕アトム」「水戸黄門」からの脱却

木村尚三郎 理事長



アニメの神様である手塚治虫さんから、生前直接伺った、きわめて印象的な話がある。

手塚さんが戦後はじめてアメリカに渡り、「鉄腕アトム」をアメリカ人に見せたところ、共通して言われた反応が二つあった。一つは、「日本人の眼は横長で細いのに、なぜお前の作品では丸くて縦長なのか」という質問であった。そしてもう一つが、「お前の作品は破壊的・暴力的である」であった。「じつに意外でした」と語る手塚さんの顔が、今も忘れられない。

同様な反応は、ヨーロッパにもある。日本のアニメ作品は、フランスのテレビで朝な夕な流されているが、時折「残酷だ」と放送禁止になる。またフランスの新聞にも、侍姿の日本人が日本刀で周囲をズタズタに切り裂く、政治諷刺漫画が掲載されることがある。

歴史的な経緯にもとづいて、最近の中国と韓国でも反日感情がふたたび噴き出して、日本側を緊張させた。これら「日本人は暴力的」というイメージは、たんに「誤解」「理解不足」「心外」では片付けられないものがある。日本側自身が、そのイメージ作りに大きく関わっているからである。

「鉄腕アトム」にせよ「水戸黄門」にせよ、日本人に絶大な人気のアニメやドラマは、能の序破急の構成を取っている。まず延々と悪がのさばる「序之舞」があり、視聴者はひたすら我慢・忍耐を強いられる。やがて序を破る、短い展開部の「破之舞」がやってくる。そして最後は一気に急テンポの「急之舞」となって、事件は一挙に、(暴)力によって解決される。

ここで「悪」とされた側は、「正」によって「ラン、ラン、ララン」と軽快に破壊し尽くされ、バツ、バツと斬り殺され、みな殺しになってしまう。堪忍袋の緒がついに切れた感じであり、それまで我慢を強いられてきた視聴者はホッとして溜飲を下げ、「良かった」と快感を

味わうことになる。「遠山の金さん」も「暴ん坊将軍」も「大魔神」も、すべて同じパターンである。

この際、「悪」と「正」とのあいだに、対話・コミュニケーションは見られない。「ケンカ両成敗」「盗っ人にも三分の理」といった、日本にも昔からある道理は通用せず、悪者とされた側の人間性は一切認められない。相手側の事情が考慮されることもなく、すべては「成敗!」の名の下に斬り殺され、踏み潰され、破壊し尽くされるのである。これでは相手方に原爆を落として、「良かった!」と快哉を叫ぶのと、どこが違うであろうか。

バクチの「丁か半か」のきわめて単純な世界に、日本人の大半が共感しているとすれば、周辺の国々が日本を「危険な国」と警戒するのも、無理からぬところがある。いつふたたび自分たちが「悪」とされ、「成敗!」の「急之舞」に襲われるか分からないからである。日本を旅するにはまず身を守る武術を身につける必要がある、と本気で思い込んでいた外国人の話を読んだばかりである。

日本人のこのような「激情による暴力」によって過去に受けた苦痛を、中国人・韓国人は忘れることができない。彼らの反日感情は、拭おうとしても拭いきれない、根強いものがある。罪の意識が薄く、「正」の気持ちで中国・韓国に乗り込んでいった日本側とのギャップは、あまりにも大きい。

もし中国・韓国とのコミュニケーションがうまく行かなければ、ユーラシア大陸全体とのコミュニケーションもうまく行かないだろう。中国・韓国は、ユーラシアの常識を共有しており、地つづき故の絶えざる戦乱のなかで、互いに「正」も「悪」もなく、人間性を見据えた外交感覚を磨き抜いてきたからである。

ことに中国とフランスの外交能力には、アメリカとて一目も二目も置かざるをえない。その中国とフランスは、今後いよいよ連繋の度合

いを強めていこう。そのなかから、「ユーラシア大陸の時代」が悠然と、そして確実に浮上してくる。これが、二十一世紀の姿である。

現代日本のアニメは人類愛・平和・環境問題その他、世界が直面するさまざまな課題に立ち向かう哲学を持ち、他国のアニメを凌駕する質の高さが評価されているのは事実である。「鉄腕アトム」「水戸黄門」世代が老化し、この世界から脱却するとともに、日本それ自

体のイメージもまた、変わっていくに違いない。

しかしその一方で、現実のコミュニケーション感覚を磨き、日本が中国・韓国の良きパートナー、ユーラシア諸国の良き友人となるべく、全力を傾ける必要があることも確かである。外交能力に乏しい日本にとって、近隣諸国との良好なコミュニケーション関係をどう構築していったらいいか。このさし迫った問題解決に貢献するのが、トヨタ財団の大事な使命の一つであると思っている。

2005年度 新プログラム紹介

2005年度事業計画が3月の第108回理事会で承認され、スタートしました。本年度は「研究助成プログラム」「地域社会プログラム」「ネットワーク形成プログラム」「計画助成プログラム」の4プログラム構成となり

ますが、この中で新たに二つのプログラムが立ち上がりました。

一つは新編成の「ネットワーク形成プログラム」、もう一つは「研究助成プログラム」の中の特定課題で、従来からの『近代化とくらし

の再発見』に加え、新テーマとして『アジア周縁部における伝統文書の保存・集成・解題』と『助成金が活きたとは』を設定しました。今回はこの二つの新プログラムを担当リーダーから紹介します。

ネットワーク形成プログラムについて

姫本由美子 チーフ・プログラム・オフィサー



発展途上のプログラム

本年度に新しく立ち上げた「ネットワーク形成プログラム」について、このニュースレターで紹介する役目を与えられて、正直いって大変困惑してしまいました。なぜならば、このプログラムの狙いに合致した、財団にすでに存在する3つのプログラムを寄せ集めて、確かに本年度にこの「ネットワーク形成プログラム」を立ち上げることはなりましたが、その中身の充実化は、これから1年近くかけてじっくり検討していく予定でして、いわば発展途上にあるプログラムといえるからであります。それでは、「ネットワーク形成プログラム」の狙いとはどのようなものでしょうか。

プログラムの目指すもの

すでにご承知のように、昨年度設立30周年を迎えた当財団では、財団のこれまでの経験を生かしながらもこれからの10年ぐらいを射程距離においた活動の新しい方向性を打ち出すために、その諮問機関として構想諮問委員会が2003年10月に設置され、検討が

重ねられております。同委員会によって、去る3月に出されました中間報告では、「アジア世界における「多元性と相補性と協働性」(平たく言い直せば「お互い様」の相互認識と関係性)を追究し、多様なレベルでの連携を推進し発展させる方向を目指すものとして今後の助成プログラムが構築されるよう、提言がなされました。さらに、そのアジアにおける「多元性と相補性と協働性」の追究の試みとして、広い意味での国際的なアジアにおける課題や問題に取り組むためのネットワーク形成を支援するような、複合的なプログラムの創設が提言され、それを受けて本プログラムが立ち上げられました。

さて、アジアにおける「多元性と相補性と協働性」を追究するにあたって、ネットワークに注目したことには、必然性があります。ネットワークの項目を広辞苑(岩波書店)で調べてみると、「市民活動・社会福祉活動・エコロジー運動などを行っている市民たちが、自在に結び合って網の目を作り、共生型のオルタナティブな社会を作ろうとする運動」と記され

ています。もちろん、このプログラムにおけるネットワーク形成とは、市民活動に限定されるものではなく、研究活動等も含めた、様々な分野の多様なレベルのネットワーキングを念頭においています。が、その意図するところは、アジアに生きる多様な人々が、お互いを認め合い、相補い、協力し合ってアジアの可能性を切り開いていくために、ひとつの頂点を中心としてピラミッド型に人々の関係が構築されるのではなく、お互いの立場を尊重しながら関係を結び合っていくことを支援すること、まさにネットワーク型の活動の支援を目指しているからです。アジアにおける様々な課題や問題を、固定的な組織や制度を通してではなく、人々の相互の関係性としてのネットワーク構築を通して取り組むことを支援します。

本年度の3つのプログラム

このプログラムの狙いがわかっていただけでしょうか。それでは、本年度「ネットワーク形成プログラム」を構成する3つのプログ

ラムについて、簡単に紹介させていただきます。まず(1)「アジア隣人ネットワークプログラム」ですが、これまで研究助成プログラムのサブ・プログラムであったもので、アジア各地の具体的な課題解決に資する研究者、実務家、実践家の出会い、交流、相互協力を支援する公募プログラムです。次に(2)「東南アジア研究地域交流プログラム(SeASREP)」ですが、これまで「東南アジアプログラム」に属していたもので、東南アジアの人々による東南アジア地域を対象とした研究の交流を支援する公募プログラムです。このプログラムの運営は現在、在マニラのSEASREP財団

が行っています。(3)「成果発表助成」は「研究助成」プログラムおよび「東南アジア国別助成(2004年度で終了)プログラム」で助成を受けた研究成果を、出版やワークショップなどの形で広く社会に発表することを支援する非公募のプログラムです。

最後に、冒頭でも触れましたように、「ネットワーク形成プログラム」は現在発展途上にあります。アジアに生きる多様な人々が、お互いを認め合い、相補い、協力し合ってアジアの可能性を切り開いていくために、平等の立場で関係を結び合っていくことを支援する

ことを狙いとした本プログラムは、社会の触媒としての役割を果たすことを理念としてきた財団のまさに目指していることです。したがって、先にあげた3つのプログラムのみでなく、より魅力的な新プログラムやネットワーク形成への働きかけも視野に入れたプロジェクト発掘型のプログラムの開発を、財団のプログラム・オフィサーの力を結集して今後も進めていく予定です。皆さんからもご提案がございましたら、どうぞお寄せください。

研究助成の新規特定課題について

本多史朗 シニア・プログラム・オフィサー



2005年度より、トヨタ財団研究助成において二つの特定課題が立ち上がった。いずれも、過去のトヨタ財団の助成の中から生まれてきた問題意識をさらに深めたり、蓄積を生かすためのものである。それぞれの背景や狙いとするところのものについて触れてみたい。

1 アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題

トヨタ財団は、その設立から間もない1970年代末以来、北タイ、インドネシア、ラオス、ミャンマー(ビルマ)、インドアッサム、雲南、台湾などの各地において地方の伝統文書のマイクロフィルム化、目録作成、翻字・翻訳・解題、影印本作成などのプロジェクトに対して支援を行ってきた。これはそれぞれの地域の郷土史の解明につながると共に、地元の人々の郷土意識やアイデンティティを高める上で大きな役割を果たした。そのことは、専門研究者のみでなく、民間学者、僧侶、名望家といった在地の民間の人々が上記のプロジェクト群に深く関わってきたことからもうかがい知れる。この流れは、トヨタ財団東南アジアプログラムの中のよき伝統であったが、2004年度をもって東南アジアプログラムが終息する際と共に終わりを告げるかと思われた。

幸いなことに、この流れに愛着を持つ財団内外の関係者が力を尽くしたおかげで、そのこと自体、伝統文書の保存関連のプ

ロジェクトというものが深い意義をもっていたことを物語るだろう。東南アジア限定のものから、アジア周縁部全般に視野を広げながら特定課題として生き残ることとなった。

中央アジア、モンゴルなどさらに地域的な広がりをもちながら、この特定課題が郷土の歴史を明らかにすると共に、地元の人々の郷土意識やアイデンティティを高めるために一層の貢献をすることが望まれる。

さらに近年所謂グローバル化の影響や、生のデジタル情報の氾濫、そして広域市場経済の浸透によって、在地の人々の暮らしの根幹が崩れ、生き方に混乱が生まれるようになってきている。この特定課題がその奔流の中で心の拠りどころの一端でも支えることができればと思う。助成金予算は1500万円。特定課題の时限は4年間を予定している。

2 助成金が活きたら 助成金によって来るところと生み出すものを視野に入れて

近年になってますますはっきりしてきたことは、学問研究というものと資金(外部資金、競争的資金、あるいは助成金といったもの)との間のつながりが切っても切り離せなくなってきたことである。かつて学問研究は、資金などという人間くさく、形而下的な関係性の集積とは無縁のもの、さらにはできるだけ距離を置くべきという考え方があったし、またそれを象徴するように浮世をはなれた研究者たちもいた。しかし、自然科学系において徐々に学問研究というものは資金なしでは行

いがたいものとなりはじめ、それが社会科学、人文科学にも浸透するようになっていく。

最近では、外部資金、競争的資金、助成金を取ること自体が、学問研究とそれを行う学者、研究者に対する評価とじかに結びつくようになってきている。そのようなものとして資金をみることは好ましいことなのだろうか。資金というものは、ある時間的、空間的な社会関係の中で生まれてくるものであり、その意味で特定の方向性をもつ。とにかく外部資金、競争的資金、助成金をとってさえくれば、という考え方は、どこかでこの資金の持つ根源的な性格とはあいられない。日本の民俗の中には、「金が活きたら」という発想がある。もし学問研究と資金との関係というものが、無縁というものでなく、あるいは何でもいから資金さえとればというものでないとするれば、この「金が活きたら」という発想の重みはましていいものと思う。

さらに付け加えれば、「助成金が活きたら」という立場をとったときには、往々にして付きまといがちで、「論文の発表点数は何本」とか「引用回数は」といった計量的な評価のものさしとは別のもので、さしが生まれてくる可能性がある。

この特定課題においては、「上のような」どうしたら助成金が活きたらのか」という問題関心のもとに、資金と学問研究の好ましい関係、より良い評価の方法などについて衆知を集めたいと願っている。助成金予算は1000万円。やはり4年間の时限を予定している。

2004年度「地域社会プログラム」贈呈式を開催して

田中恭一 プログラム・オフィサー



トヨタ財団は、2005年4月9日土 渾内（経団連会館）において、2004年度「地域社会プログラム」の助成金贈呈式を開催した。当日は、助成対象者56チームのうち53チームからの参加をはじめ、財団関係者を含む100名を超える参加があり、盛会であった。

今回の贈呈式は新しい「地域社会プログラム」の初回でもあり、プログラムの趣旨を改めて助成対象者と共有することができた。式典では、木村尚三郎理事長の「新しいプログラムの門出」をアピールした挨拶や、選考委員長長の姜尚中氏（東京大学教授）による当プログラムの狙い・特徴を踏まえた選後評が行われた。

また今回の贈呈式では、助成対象者同士の交流の場を提供することを狙いに、5つの助成対象者に助成プロジェクトの紹介をお願いした。このことを通じて、他の団体による活動を知る機会を提供することができた。報告者は、「子飼商店街振興組合（熊本）」、「NPO市民文化財ネットワーク鳥取」、「保見ヶ丘国際交流センター（愛知）」、「さなぎ達（神奈川）」、そして「岩手子ども環境研究

所」であった。報告者の選定は、地域バランス、テーマを考慮しつつ当財団側で行った。

なお、式典後の懇親会では、助成対象者からもプログラムに共感する声をいただく等、財団側のプログラムにける思いや熱意が伝わったという手ごたえを感じた。さらに、先のプロジェクト紹介を会話のきっかけにした話の輪が会場のあちこちでみられ、お互いのプロジェクト現場を訪問しあう約束、資金難の解決に際しての方法等を話題にしつつ、活発な交流が行われていた。

同時に、財団への要望も聞くことができた。助成対象者を対象としたメーリング・リストの作成、地方での成果報告会の開催、主催行事への財団スタッフの参加等、助成対象者からいろいろな声が寄せられた。今後、可能な限り対応していきたいと考えている。

助成対象者からのメッセージ

1 特活 子どもNPOセンター福岡代表理事 大谷順子氏

閉塞感に満ちた社会の、再生へのカギは「地域」にあると感じています。なぜなら地域

にこそ、これまでの社会がもたらした様々な歪みや課題が具現化し、解決のための智恵やエネルギーもそこに潜在するからです。とりわけ子どもに関しては、と私は思っています。相次ぐ虐待事件、不登校や引きこもり、二つの増加、子どもたちによる事件の多発……。日本の子どもたちはかつてない危機的状況にあり、それは明日の社会の危機を意味します。地域ではいま、子どもの問題への市民の取り組みが多様な広がりを見せ、そのネットワーク化、行政との協働も急速に進んでいます。私たちの願いは「子どものいのちを守り、育ちを保障する地域づくり」。それは皆が支え合って生きる地域社会の再構築でもあります。「地域の可能性」に期待をかけられた、この度の「地域社会プログラム」の創設に心から感謝し、ご支援に対して必ずよき実を結ぶよう力をつくしたいと心引き締めております。

2 特活 旭川NPOサポートセンター 森田裕子氏

「農業体験ねこの手ネットワーク」事業がトヨタ財団の助成のおかげで実現できますことを、心から感謝いたします。北海道の北に位置するここ旭川は、大雪の山々に囲まれた米作や畑作の盛んな土地です。しかし農業を取り巻く環境は年々厳しくなり、このままでは北海道農業は継続できなくなるのではないかと危機感があります。安全安心な食の供給のために、消費者が農業にもっと理解を深め、生産者と顔の見える関係を築いて農業の応援団になってほしいとの思いで、3年前から温めていた企画です。今あまり元気がないといわれる北海道が、こうした試みによって、フロンティアスピリット溢れる大地としてもう一度、人々に希望と夢を与え続けていけることを期待し、実施してまいります。今後とも皆様の強力なご協力とご支援をお願い申し上げます。



2004年度地域社会プログラム贈呈式 左は木村尚三郎理事長